

ワンポイント・ブックレビュー

岩村暢子著『普通の家族がいちばん怖い 徹底調査 破滅する日本の食卓』

新潮社（2007年）

「恵方巻」という、それまで聞き慣れなかった節分行事がコンビニの宣伝でたった数年のうちに日本中を席卷したことに違和感を持っていたのだが、この本を読んで納得することができた。

どぎつい題名であるが、この本のよいところは社会調査の分析報告書であるという点である。著者の勤めるマーケティング会社の業務として自由記述式アンケート約100人、グループインタビュー約30人、これを99年、04年の2回にわたって実施している。フツウの意味は「就労していない主婦」の意味である。著者は2003年に日常の食生活についての調査レポート『変わる家族 変わる食卓』（勁草書房）を刊行して、ロングセラーとなっており、この本はその続編に当たる。

調査では、おせち料理を中心に正月行事をどうしているか、そしてクリスマス行事をどうしているかをたずねている。

ここでは、正月に伝統的なおせち料理をつくらない、既製品を並べるが子どもたちも自分も食べない、そしてふだんの休日のように家族がバラバラに起きて菓子パンやカップ麺をそれぞれ食べ、その後の時間も別々に過ごす世帯がフツウにみられることが写真付きで示されている。一方で、クリスマスには、電飾をはじめ念入りな飾り付けがほどこされ、中高校生になった子どもの半数がサンタからのプレゼントを受け取っていることが示される。この背景に、子どものために、といいながら、母親が子どもをペットのように扱い、もっぱら自己満足のために行動していてしつけもしない実態、夫や自分の実家ではお客さま扱いされて当然と考える主婦がフツウになっている実態がインタビュー回答者のことばで語られている。

時代とともに食生活が変化し、家庭行事の形が変わるのは当然であり、そのこと自体を伝統の崩壊として嘆く必要はないのだが、そこから見えてくる家族関係の希薄化が分析の中心ポイントとなっている。やや決めつけ的な分析も散見されるが、正月行事とクリスマス行事という具体的な事柄を通して観察しているために説得力あるものとなっている。調査対象者である主婦に対する批判がことばのはしはしにうかがわれることもやや気になるが、著者も述べているように、共働き世帯でも状況は同じだと考えられる。

「恵方巻」が広がったのは、伝統よりも世間＝「子どもにみんなと同じようにしてあげたい」を大切にしようとする気持ちに添ったものであり、既製品ですむので夕食の準備がいらす手間のかからない行事であることが、現代のフツウの家庭のニーズにぴったりだったためである。きっと本書のようなマーケティング情報が”有効活用”されたのであろう。（T・S）